

## 夢をかたちに…きみが外科医になる日

長崎市民病院内 長崎市 病院局 病院事業管理者  
(前 長崎大学大学院 移植・消化器外科 教授) 兼松 隆之



小中学生の外科体験キッズセミナー(以下キッズ)について紹介する。第一生命が2009年に保育・幼稚園児と小学生を対象に実施した「大人になったらなりたいもの」アンケートによると、男の子の5位と女の子の7位が「お医者さん」になっている。私自身も、福岡県の田舎で内科医していた家庭の3代目として生まれ、医師を志した。小さいころから気が弱く、血を見ることとトマトが苦手だった。到底外科医にはならないと思っていた。そんな私が外科を選んだのは、医学部4年生のある実習がきっかけだった。当時の医学部は、まだまだ座学や講義が主体だったが、研修先の病院の外科の先生が「最後の一针を君がかけなさい」と言ってくれた。それに大変感動して、外科医になりたいと思ったのだ。そのときの病院の手術記録には私の名はないが、確かに私が外科医を目指したのは、この一针だったのだ。若い医師や学生が外科医の仕事を通じて感動することが多いなら、子どもたちならもっと感動してくれるの

ではないか?—そのような思いから、2005年に第1回のキッズを長崎大学で開催することにした。

子どもたちが医療あるいは外科に興味を持つようになるには、Knowing(知る)、Doing(実行する)、Feeling(感動する)という3つのステップ必要だと思う。そのためキッズでは、実際の模擬手術場を作って手術着を着て、自らが手を動かす。手術が終わったら修了証書を渡し、ポラロイドで記念写真を撮るというプロセスにしている。

### 離島の子どもたちに外科医体験

キッズの2回目は長崎県にある五島列島の福江市で、翌年には北松浦郡で開催した。2007年には、北海道の野付郡別海町でも開いた。なぜこのように人口の少ない地域でも開くかというと、“田舎に住む子どもたちにも職業体験の機会を与えたい”という思いがあったからだ。さらに、地元の若い人材にもっと医療に興味を持って

もらい、地域の医療崩壊を防いでほしいという希望もある。

長崎県をはじめとして、2010年12月現在、52施設90回のキッズが開催されて約3,000名の子どもたちが参加できたのは、ジョンソン・エンド・ジョンソンをはじめ、地元の医療機関の協力があってこそだと思う。キッズの取り組みに賛同者が多いのは、ひとえに子どもたちが真剣な目で外科体験をしている様子がわかるからだ。中には、キッズに参加できる年齢に満たない子どもが、最前列で話を聞き、体験したくてゴム手袋を装着し始めることがある。ここまで子どもたちが真剣だと、スタッフはそのやる気に応えたくなくなってくるのだ。

キッズの感想としてスタッフからよく聞くのは「(医療機材の搬入や設置などの)準備は本当に大変でしたが、子どもたちが明るく楽しく体験している姿を見ると、準備の大変さを忘れてしまいました」というものだ。これは、我々医師を含めたスタッフ全員の一致した気持ちだ。会場には、子どもたちだけではなく保護者も来ているが、父親の方が夢中になっているケースも珍しくない。

キッズが地域医療崩壊の特効薬となるかどうかはわからない。しかし、子どもたちの純粋な笑顔を見ていると、少なくとも子どもたちに感動を与えられたことだけは実感している。各方面での協力を仰ぎながら、今後もキッズを幅広く開催していきたい。

